

臨濟宗の回向文 訳注（七）

—— 年分行事（下）の回向文 ——

妙心寺派教化センター 教学研究委員会

《凡例》

○本訳注で取りあげる偈文と回向文は、主として、禪文化研究所編集『新修 臨濟宗勤行聖典』（三巻、禪文化研究所・一九九五年）*以下「新修」を省く）所掲の字句に拠った。書き下し文については、『諸回向清規式』『小叢林略清規』を参考にしながら、主として『臨濟宗勤行聖典』に見られる現行の読み方に基づいた。

○善通寺所蔵本『諸回向清規式』（国文学研究資料館・新日本古典籍総合データベース）は「善通寺本」、禪文化研究所訓注・編集の江湖叢書『小叢林略清規』所収の影印本（禪文化研究所・一九九五年）は「禪文化本」、『大正新修大藏經』は「大正本」と表記して、その字句を比較して、その異同について確認した。

○底本とした『臨濟宗勤行聖典』は、回向文中に具体的な經典名を挙げているが、校本によつて差があり、また現状とも異なる場合もあるため削除し、校記で指摘するにとどめた。

○『諸回向清規式』『小叢林略清規』は、ともに『大正新修大藏經』巻八一に収められているため、各偈文・回向文の冒頭に該当する頁数・段数を併せて表記した。

○原文・校記・書き下し文・口語訳・語注の順に並べた。

○原文・校記・書き下し文・口語訳・語注ともに常用漢字を用いた。

○書き下し文は、現代仮名遣いを用いた。

○現代語訳は直訳を心がけたが、必要と思われる場合は「」で適宜ことを補った。

○語注で『大正新修大藏經』を引用する際、その出典表記については「T」、『新版大日本統藏經』は「X」、『藏外仏教文獻』は「ZW」の略号を使用した。

○語注で使用した辞書類の略号は次の通りである。

『漢語』……………『漢語大詞典』全十二冊（羅竹風 主編・上海辭書出版社）

『漢辭海』……………『漢辭海』第四版（三省堂）

『織田』……………織田得能『織田仏教大辭典』（大藏出版株式会社）

『中村』……………中村元『仏教語大辭典』（東京書籍）

『禅学』……………駒澤大学『新版 禅学大辭典』（大修館書店）

『禅林象器箋』……………『禅林象器箋』全二〇巻・目錄二巻（国際禅学研究所・電子達磨）

○回向には同じ用語が繰り返し使用されることが多い。本訳注は連載であり、既出の論考については、以下の通りに表記したい。

臨済宗の回向文 訳注（一）葬儀・法事の偈文と回向文……………訳注①

同上（二）尊宿送喪の念誦と回向文（上）……………訳注②

同上（三）尊宿送喪の念誦と回向文（下）・尊宿臨時行事の回向文……………訳注③

同上（四）日課行事の回向文……………訳注④

同上（五）飯台座で唱える偈文……………訳注⑤

同上（六）月分行事・年分行事（上）の回向文……………訳注⑥

○語注で取りあげた訳注書のうち、岩波文庫本を用いた場合は「岩波文庫本」と表記した。

仏涅槃会回向（一）

『臨濟宗勤行聖典』第二卷「年分諷經」p.208～211『諸回向清規式』卷一・諸回向之部「仏涅槃忌半齋」17a・181-631a' 『小叢林略清規』卷下「仏涅槃忌回向」181-715c・「禪文化本」p.177/p.314a' 「江湖法式梵唄抄」p.175～176

大円満覚応迹⁽¹⁾西乾⁽²⁾⁽³⁾、心包太虚量周沙界⁽⁴⁾⁽⁵⁾。

仰冀真慈⁽⁶⁾、俯垂昭鑑⁽⁷⁾。

山門⁽⁸⁾（一）今月十五日伏値、本師釈迦如来大和尚、入般涅槃之辰⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾。

虔備⁽¹¹⁾香華灯燭、茶菓珍饈⁽¹²⁾、以伸供養。

謹集⁽¹³⁾合山⁽¹⁴⁾（現前）（三）比丘衆同音諷誦⁽¹⁵⁾。

大仏頂万行首楞嚴神呪、所集殊勳⁽¹⁶⁾、上酬慈蔭⁽¹⁷⁾、伏願。

如在靈山⁽¹⁸⁾、莫忘四衆⁽¹⁹⁾、不離宝座⁽²⁰⁾、普化十方⁽²¹⁾、六道群生⁽²²⁾、同円種智⁽²³⁾。

十方三世一切諸仏、諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅蜜⁽²⁴⁾。

（一）仏涅槃会回向Ⅱ『諸回向清規式』では「仏涅槃忌半齋二月十五日」に作り、『小叢林略清規』では「仏涅槃忌二月十五日」に作る。
（二）山門Ⅱ『諸回向清規式』・『小叢林略清規』ともに、「某門」に作る。
（三）合山（現前）Ⅱ『諸回向清規式』・『小叢林略清規』ともに、「合山」と「現前」を併記して作る。

*

大円満覺、迹を西乾に応ず、心は太虚を包みて、量は沙界に周ねし。

仰ぎ冀わくば、真慈、俯して昭鑑を垂れたまえ。

山門今月十五日、伏して本師釈迦如来大和尚入般涅槃の辰に値う。虔しく香華灯燭、茶菓珍饈を備え、以て供養を伸ぶ。謹んで合山（現前）の比丘衆を集め、同音に大仏頂万行首楞嚴神呪を誦誦す。集むる所の殊勲は、上、慈蔭に酬いんことを。伏して願わくば、靈山に在すが如く四衆を忘るること莫く、宝座を離れず、普く十方を化し、六道の群生、同じく種智を円かにせんことを。十方三世一切の諸仏、諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅蜜。

*

大円満な仏の悟りは、そのすがたをインドに現しました。（仏の）心は大なる虚空を包み込み、その広大な心のはたきは無量無数の世界すべてにゆきわたっています。

仏祖の慈悲もて、どうか「わたしたちを」ご照覧ください。

当山では、今月の十五日、本師釈迦如来大和尚の入滅の時を迎えました。「敬意を込めて」恭しく香・華・灯燭・茶・菓子・ご馳走を供え、供養いたします。つつしんでこの寺に住むすべて（目の前）の僧侶を集めて、声をそろえて『大仏頂万行首楞嚴神呪』をお唱えします。「こうした供養によつて」集めたすばらしい功德は、慈しみに満ちた仏恩に酬い奉るものであります。伏して願うことには、「かつての説法のある」靈鷲山にいらつしやるかのように、「比丘（男性の出家者）・比丘尼（女性の出家者）・優婆塞（男性の在家信者）・優婆夷（女性の在家信者）」すべての仏教徒をお忘れなく、「仏がお座りになられている」蓮華座を離れずに、普く世界中を教化し、迷いの世界にいる生きとし生けるものたちが共に悟りの智慧を円

成致しますように。世界中の、そして過去・現在・未来という三世の一切の諸もろの仏がたよ、諸もろの尊き菩薩がたや修行者たちよ、偉大なる完成された最高の智慧よ。〔この功德が成就しますように。〕

*

- (1) 大円満覚 〓 「大円」は、「大きな円相、円融自在の表詮、大円成」(『禅学』p.785)、「大円覚」は、「円満で完全なる大覚。仏の悟りのこと」(『禅学』p.765)。「幻住庵清規」卷一「世範」条、「朔望(朔望は一日と十五日) 祝聖回向」に「大円満覚応迹西乾、心包太虚量周沙界。某州某庵住持臣僧某。月旦月望令辰。謹集合庵僧道衆誦誦大悲円満云云神呪、所集洪因、端為祝延。今上皇帝聖寿万安。金剛無量寿仏。仁王菩薩摩訶薩云云」(X63-578a)とあり、「祝聖回向」の「嘆仏」として唱えられていたことが分かる。
- (2) 迹 〓 「現れたすがた、教化のすがた、救いのすがた」(『中村』p.615)。
- (3) 西乾 〓 「インドの別称。乾は天。中国から指して西方天竺のこと」(『禅学』p.372)。
- (4) 太虚 〓 ①究極の境地。②全くの空無。空無なること」(『中村』p.304)。「ちなみに『浄土境観要門』卷一に「此の相を觀んと欲せば、応に須く先づ万法は唯心にして一切は唯識なるを了るべし。故に経に云く、『心は太虚を包みて量は沙界に周ねし』と。又た云く、『心は工なる画師の如し。種種の五陰を造る』と(欲觀此相、応須先了万法唯心一切唯識。故経云、心包太虚量周沙界。又云、心如工画師。造種種五陰)」(T47-290a)と見える。
- (5) 沙界 〓 「恒沙界、または恒河沙世界の略。恒河にある沙のように無量無数の多くの世界」(『禅学』p.466)。
- (6) 真慈 〓 訳注③「祖師遠忌回向」の注(4)「真慈」条を参照。
- (7) 昭鑑 〓 訳注③「祖師遠忌回向」の注(5)「昭鑑」条を参照。
- (8) 山門 〓 訳注④「本尊回向」の注(23)「山門」条を参照。
- (9) 本師 〓 「ほんじとも読む。釈迦牟尼仏のこと。根本の師という意」(『中村』p.1261)。
- (10) 入般涅槃 〓 「入滅の意。仏および僧侶の死をいう」(『禅学』p.986)。「なお、『涅槃』は「梵 nirvana / 巴

nirvana 語源からいえば、nirvanaとは吹き消すことで、貪瞋痴の三毒煩惱の火を吹き消すこと、または煩惱の火が吹き消されている状態」をいい、「涅槃会」は「涅槃忌ともいい、三仏忌（降誕会・成道会・涅槃会）の一。釈尊は二月十五日に入滅したので、後世この日に、釈尊涅槃像をかけ、『涅槃経』『仏遺教経』等を読誦して行う報恩の供養法会」（『禪字』p.1001）。『禪林象器箋』「第四類 節時門」章・「忌日」条には、「『釈氏要覧』に云く」として、「二月十五日の仏涅槃日には、天下の僧俗、営会（＝法会を営む）し供養すること有り。即ち忌日の事なり。俗の礼に『君子に終身の孝有り』と。『忌日』の謂なり。又た『不楽の日（＝音楽を催さない日）』と謂う。飲樂せざるが故に。或いは『諱日』と云い、或いは『遠日』と云う。『遠日』は猶お『曲礼』の「喪事は遠日を先にす」に濫す（＝起源する）。釈子（＝仏弟子）の師亡すれば『帰寂の日』と称すべし。蓋し釈氏は忌諱むこと無きが故に」と。『首楞嚴経』に云く、『時に波斯匿王、其の父の為に諱日に斎を営む』と。長水（＝長水子璿）の疏に云く、『先王の崩ずる日は、忌諱の辰なり。故に『諱日』と云う。諱は忌なり。吉事に拏ぐることを忌み、其の名を諱避するを以てなり』と（釈氏要覧云、二月十五日、仏涅槃日、天下僧俗、有営会供養。即忌日之事也。俗礼君子有終身之孝。忌日之謂也。又謂不楽之日。不飲樂故。或云諱日、或云遠日（遠日、猶濫曲礼喪事先遠日）。釈子師亡可称帰寂之日。蓋釈氏無忌諱故。首楞嚴経云、時波斯匿王、為其父王。諱日営斎。長水疏云、先王崩日、忌諱之辰。故云諱日。諱忌也。以忌拏吉事、諱避其名）（卷三・22a）とある。また、『禪苑清規』卷二「念誦」条に「大衆に白す。如來大師、般涅槃に入る。今皇宋元符二年に至り、已に二十四十七年（以後年に随いて之を増すなり）を得たり。是の日に已に過ぐれば命も亦た随つて滅ず。少水の魚の如し、斯に何の樂か有らん。衆等當に勤めて精進し、頭燃を救うが如くすべし。但だ無常を念じて慎しんで放逸することを勿れ。伽藍土地護法安人。十方施主増福増慧。為如上緣念。清淨法身等云云（白大衆。如來大師、入般涅槃。至今皇宋元符二年已得二十四十七年（以後隨年増之）。是日已過命亦隨滅。如少水魚、斯有何樂。衆等當勤精進、如救頭燃。但念無常慎勿放逸。伽藍土地護法安人。十方施主増福増慧。為如上緣念。清淨法身等云云）」（X63-527c）とある。また、「入般涅槃」は「尊宿龕前念誦」に見えるが、この語が「尊宿龕前念誦」に取り入れられ

た背景については、訳注②「尊宿龜前念誦・龜前念誦諷經回向」の注(一)条に詳しい。

- (11) 香華 〓 訳注③「祖師遠忌回向」の注(7)「香華」条を参照。
- (12) 珍饈 〓 訳注③「祖師遠忌回向」の注(9)「珍饈」条を参照。
- (13) 合山 〓 訳注③「祖師遠忌回向」の注(10)「合山」条を参照。
- (14) 現前 〓 訳注③「祖師遠忌回向」の注(11)「現前」条を参照。
- (15) 諷誦 〓 訳注③「祖師遠忌回向」の注(12)「諷誦」条を参照。
- (16) 殊勳 〓 訳注③「尊宿山頭念誦」の注(13)「殊勳」条を参照。
- (17) 上酬慈蔭 〓 訳注④「伝燈祖師回向」の注(6)「上酬慈蔭」条を参照。
- (18) 靈山 〓 「靈鷲山の略。王舎城の東北にそびえるやま」(『中村』p.1429)。『石溪心月禪師語録』巻一に「上堂。挙す。南陽国師三たび侍者を喚ぶ。侍者三たび応ず。師云く、是れ父有り、是れ子有りと。国師云く、まさ將に謂えり、吾れ汝に辜負す、却つて是れ汝吾れに辜負すと。師云く、靈山に在りて、親しく此の語を聞くがごとしと。雪竇云く、国師三たび喚ぶ。点ずれば即ち到らずと。師云く、雲嶺上に生ず。侍者三たび応ず。到れば即ち点じず。師云く、月波心に転ず。將に謂えり、吾れ汝に辜負す、却つて是れ汝吾れに辜負すと。(上堂。挙。南陽国師三喚侍者。侍者三応。師云、有是父、有是子。国師云、將謂吾辜負汝、却是汝辜負吾。師云、如在靈山親聞此語。雪竇云、国師三喚。点即不到。師云、雲生嶺上。侍者三応。到即不点。師云、月転波心。將謂、吾辜負汝、却是汝辜負吾」(X71-44a)とある。
- (19) 四衆 〓 「仏教教団を構成する人。比丘(出家の男)・比丘尼(出家の女)・優婆塞(在家信者の男)・優婆夷(在家信者の女)。四部衆、四輩とも」(『禅学』p.432)。「仏教教団の中の出家の衆と在家の衆。四衆の仏教徒。仏教者のくわん」(『中村』p.515)。
- (20) 宝座 〓 「仏の座所。蓮華座」(『漢辞海』p.396)。
- (21) 六道 〓 「有情が善悪業因によつて到る六種の路 (sattī 趣)で地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六界。

衆生が輪廻する道途であるから六道といい、衆生がそれぞれ因業に乗じて趣くところであるから六趣という」

『禪学』p.1319)、「世の人ひつ」(『中村』p.1457～1458)。

(22) 群生Ⅱ訳注④「本尊略回向」の注(8)「群生」条を参照。

(23) 種智Ⅱ訳注④「本尊回向」の注(32)「種智」条を参照。

(24) 十方三世一切諸仏…摩訶般若波羅蜜Ⅱ訳注①「鎖籠」起籠「仏事」の注(4)「十方三世一切諸仏…摩訶般若波羅蜜」条を参照。

仏誕生会回向(一)

『臨済宗勤行聖典』第二卷「年分諷経」p.212～215『諸回向清規式』卷一・諸回向之部「仏誕生忌半斎」17b・181-631a～b、『小叢林略清規』卷下「仏誕生会回向」181-715c・「禅文化本」p.177～178/p.314a～b
「法式梵唄抄」p.177～178)

大円満覚応迹⁽¹⁾西乾⁽²⁾⁽³⁾、心包太虚量周沙界⁽⁴⁾⁽⁵⁾。

仰冀真慈⁽⁶⁾、俯垂昭鑑⁽⁷⁾。

山門⁽⁸⁾三三今月初八日伏値、本師釈迦如来大和尚、聖誕之辰⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾。

虔備香華灯燭⁽¹¹⁾、茶菓珍饈⁽¹²⁾、以伸供養。

謹集⁽¹³⁾三合山⁽¹⁴⁾(現前)⁽¹⁵⁾比丘衆同音諷誦。

大仏頂万行首楞嚴神呪、所集殊勳⁽¹⁶⁾、上酬慈蔭⁽¹⁷⁾、伏願。
 憫昏々⁽¹⁸⁾之群類⁽¹⁹⁾、昭以毫光⁽²⁰⁾、拔蠱々⁽²¹⁾⁽²²⁾之四生⁽²³⁾、証茲妙果⁽²⁴⁾。
 十方三世一切諸仏、諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅蜜。

(一) 仏誕生会回向 、『諸回向清規式』では「仏誕生忌半齊四月初八日」に作り、『小叢林略清規』では「仏誕生会回向四月八日」に作る。
 (二) 山門 、『諸回向清規式』・『小叢林略清規』ともに、「某門」に作る。
 (三) 謹集 、『小叢林略清規』では集謹とする。
 (四) 合山(現前) 、『諸回向清規式』・『小叢林略清規』ともに、「合山」と「現前」を併記して作る。
 (五) 昏々 、『諸回向清規式』・『小叢林略清規』ともに、「昏昏」に作る。
 (六) 蠱々 、『諸回向清規式』・『小叢林略清規』ともに、「蠱蠱」に作る。

*

大円満覚、迹を西乾に應ず、心は太虚を包みて、量は沙界に周ねし。

仰ぎ冀わくば、真慈、俯して昭鑑を垂れたまえ。

山門今月初八日、伏して本師釈迦如来大和尚聖誕の辰に値う。虔しく香華灯燭、茶菓珍饈を備え、以て供養を伸ぶ。謹んで合山(現前)の比丘衆を集め、同音に大仏頂万行首楞嚴神呪を誦誦す。集むる所の殊勳は、上、慈蔭に酬いんことを。伏して願わくば、昏々の群類を憫んで以て毫光を照らし、蠱々の四生を抜いて、茲の妙果を証せしめたまわんことを。 十方三世一切の諸仏、諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅蜜。

*

広大円満な仏の悟りは、そのすがたをインドに現しました。「仏の」心は大いなる虚空を包み込み、その

広大な心のはたらきは無量無数の世界すべてにゆきわたっています。

仏祖の慈悲もて、どうか「わたしたちを」ご照覧ください。

当山では、今月の初八日、本師釈迦如来大和尚の聖誕の時を迎えました。「敬意を込めて」恭しく香・華・灯燭・茶・菓子・ご馳走を供え、供養いたします。つつしんでこの寺に住むすべて（目の前）の僧侶を集めて、声をそろえて『大仏頂万行首楞嚴神呪』をお唱えします。「こうした供養によつて」集めた素晴らしい功德は、慈しみに満ちた仏恩に酬い奉るものであります。「こうした供養によつて」集めた素晴らしい功德は、慈しみに満ちた仏恩に酬い奉るものであります。伏して願うことには、「迷いという」暗闇にいたるすべての世界の生きとし生ける者たちを憐れんで、仏の智慧の光でもって「その暗闇を」照らし、もの道理に暗い（がために）、迷いの世界「をさまよう」あらゆるいのちある者を救つて、この妙なる仏果を悟らせることができますように。世界中の、そして過去・現在・未来という三世の一切の諸もろの仏がたよ、諸もろの尊き菩薩がたや修行者たちよ、偉大なる完成された最高の智慧よ。「この功德が成就しますように。」

*

- (1) 大円満覚Ⅱ本訳註「仏涅槃会回向」の注(1)を参照。
- (2) 迹Ⅱ本訳註「仏涅槃会回向」の注(2)を参照。
- (3) 西乾Ⅱ本訳註「仏涅槃会回向」の注(3)を参照。
- (4) 太虚Ⅱ本訳註「仏涅槃会回向」の注(4)を参照。
- (5) 沙界Ⅱ本訳註「仏涅槃会回向」の注(5)を参照。
- (6) 真慈Ⅱ訳注③「祖師遠忌回向」の注(4)「真慈」条を参照。
- (7) 昭鑑Ⅱ訳注③「祖師遠忌回向」の注(5)「昭鑑」条を参照。
- (8) 山門Ⅱ訳注④「本尊回向」の注(23)「山門」条を参照。

(9) 本師「本訳註「仏涅槃会回向」注(9)を参照。

(10) 聖誕「天子や皇太后、また神や仏の誕生日」(『漢辭海』p.1163)。また、「誕生会」とは「釈尊または各宗の祖師の誕生日に催す法会。また降誕会ともいう」(『禪字』p.837)。「禪林象器箋」第十六類「報持門」章・「二祖三仏忌」条には、「二祖とは、達磨及び某寺の開山なり。或いは云く、達磨百丈の二忌なり。三仏とは、涅槃忌、誕生会、成道会なり。忠曰く、『誕生と成道とは忌に非ず。然るに二祖三仏忌と言うは、多に随いて名を得るなり』と。正月十七日を百丈忌と為し、十月五日を達磨忌と為す。然るに日本古来百丈忌を修せず、故に某寺の開山忌を加えて、以て二祖忌と為す。凡そ開山忌は常住より之を経営す。達磨百丈の二忌は、修財を率いて營弁す。常住之を措致するに非ず(二祖者、達磨及某寺開山也。或云、達磨百丈二忌也。三仏者、涅槃忌、誕生会、成道会也。忠曰、誕生成道非忌。然言二祖三仏忌、随多得名也。正月十七日、為百丈忌、十月五日為達磨忌。然日本古来不修百丈忌、故加某寺開山忌、以為二祖忌矣。凡開山忌自常住經營之。達磨百丈二忌、率衆財營弁。非常住措致之)」(卷十三・12a)とあり、「三仏忌」と呼ぶ理由について言及している。ちなみに、「仏誕生会」の際に行う「浴仏(灌仏とも)」について、『禪林象器箋』第十六類「報持門」章・「浴仏」条に『仏祖統紀』に云く、『摩訶利頭經』に四月八日は是れ仏生日なり。人民仏を念じ仏の形像を浴す』と。旧説に曰く、「浴仏香湯の方、沈香(一両)、白檀(一両)、甘松(半両)、丁香(半両)、薰陸(半両)、芎藭(半両)、鬱金(一錢三分)、此の七種、淨布囊に盛りて、鎰内に投じ、淨水三揆を用いて、煎じて二揆を減じて鎰を移して、之を冷まし、然る後浴盆に盛る」と。『天中記』に云く、「四月八日、浴仏、都梁香を以て青色水と為し、鬱金香赤色水と為し、丘陵香、白色水と為し附子香黄色水と為し、安息香を黒色水と為し、以て仏頂に灌す(仏祖統紀云、摩訶利頭經、四月八日は仏生日。人民念仏浴仏形像。旧説曰、浴仏香湯方、沈香(一両)、白檀(一両)、甘松(半両)、丁香(半両)、薰陸(半両)、芎藭(半両)、鬱金(一錢三分)、此七種。盛淨布囊、投於鎰内、用淨水三揆、煎減二揆移鎰、冷之、然後盛浴盆。天中記云、四月八日、浴仏、以都梁香為青色水、鬱金香為赤色水、丘陵香、為白色水、附子香為黄色水、安息香為黒色水、以灌仏頂)」(卷十三・33a-b)とある。

- (11) 香華 〓 訳注③ 「祖師遠忌回向」の注(7) 「香華」条を参照。
- (12) 珍饈 〓 訳注③ 「祖師遠忌回向」の注(9) 「珍饈」条を参照。
- (13) 合山 〓 訳注③ 「祖師遠忌回向」の注(10) 「合山」条を参照。
- (14) 現前 〓 訳注③ 「祖師遠忌回向」の注(11) 「現前」条を参照。
- (15) 諷誦 〓 訳注③ 「祖師遠忌回向」の注(12) 「諷誦」条を参照。
- (16) 殊勳 〓 訳注③ 「尊宿山頭念誦」の注(13) 「殊勳」条を参照。
- (17) 上酬慈蔭 〓 訳注④ 「伝燈祖師回向」の注(6) 「上酬慈蔭」条を参照。
- (18) 昏昏々々 〓 『禅学』に「昏昏地」として「昏は暗闇。地は助詞。心のはたらきを欠き智慧の光明の暗いこと」とある(p.366)。
- (19) 群類 〓 「機類種種なる衆生のこと。群機。群生。群萌。有情。衆生」(『禅学』p.256)。「群生」については、訳注④「本尊略回向」の注(8)「群生」条を参照。
- (20) 毫光 〓 「仏の眉間にある白毫の光。仏の智慧の光にたといえる」(『中村』p.405)。
- (21) 拔 〓 「救う」の意(『漢辞海』p.586)。
- (22) 蠢々 〓 「うごめく。動き乱れるさま」(『中村』p.675)。
- (23) 四生 〓 「四種類のあらゆる生きもの。いのちあるもの。迷いの世界のあらゆる生きもの。あらゆる生きものをその生まれ方の相違によって四つに分類している。(1) 胎生。母胎から生まれるもの。人間や獣をいう。(2) 卵生。卵から生まれるもの。鳥のようなものをいう。(3) 湿性。湿気の中から生まれるもの。ぼうふらや虫などをいう。はじめした所から生まれる。(4) 化生。過去の自分の業の力によってつくり出された存在。よりどころなしに、忽然として生まれたもの。天人や地獄の衆生などはこれに属する。人間は胎生で、餓鬼は胎生のものと化生のものがあり、天人(神々)と地獄の衆生とは化生であり、畜生は胎生のものと卵生のものと湿性のものがある。中有も化生である。胎生・卵生・湿性・化生をつぎつぎにめぐること。四度の生死をいう」

（『中村』 p.523）。

（24） 妙果^{（24）}「みことな結果。妙因、妙行によつて得た証果、すなわち仏果。さとり」（『中村』 p.1302）。

（25） 十方三世一切諸仏…摩訶般若波羅蜜^{（25）} 条を参照。
波羅蜜」条を参照。

山門施食会（孟蘭盆会）回向（一）

（『臨濟宗勤行聖典』第二卷「年分諷經」 p.220～226『諸回向清規式』卷一・諸回向之部「施餓鬼七月十五日」 22b～23a・T81-632b～c『小叢林略清規』卷下「孟蘭盆会回向七月十五日」 T81-716b～c・「禪文化本」 p.179～182/p.315b～316a『江湖法式梵唄抄』 p.182～184）

仏身充満^{（1）}於法界^{（2）}、普現一切群生前^{（3）}、

隨緣赴感^{（4）}靡不周^{（5）}、而常處此菩提座^{（6）}。

仰冀洪慈^{（7）}、俯垂昭鑑^{（8）}。

山門^{（9）}（二）今月十五日^{（10）}、乃衲子自恣之辰^{（11）}、是孟蘭盆救苦之日^{（12）}（三）。

嚴備六味妙供^{（13）}。謹集現前清衆^{（14）}、稱揚聖号^{（15）}、課持秘呪^{（16）}、今当滿散^{（17）}、同音諷誦^{（18）}。

大悲円満無礙神呪^{（19）}、開甘露門^{（20）}、大仏頂万行首楞嚴神呪^{（21）}（觀音普門品）^{（22）}、所鳩善利仰讚^{（23）}。

十方常住三宝^{（24）}、果海無量聖賢^{（25）}、祝献^{（26）}。

護法⁽²⁸⁾列位、諸天仙衆⁽²⁹⁾、地界水界⁽³⁰⁾、大小明靈⁽³¹⁾。

總日本国内、一切明靈、一切權現⁽³²⁾、三界万靈、十方至聖、憑茲善利、普用回嚴⁽³⁴⁾、次冀。

尽祠堂内、各々⁽³⁵⁾靈位、同受法味⁽³⁶⁾、以護⁽³⁷⁾佛祖之化門⁽³⁸⁾、各增威光⁽³⁹⁾、而除國家之災障⁽⁴⁰⁾、專祈。

資薦⁽⁴¹⁾各人多生父母⁽⁴²⁾、歷劫冤親⁽⁴³⁾、一切幽靈⁽⁴⁴⁾、河沙⁽⁴⁵⁾餓鬼⁽⁴⁶⁾、咸出迷衢⁽⁴⁷⁾、同登覺路⁽⁴⁸⁾。

十方三世一切諸仏、諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅蜜。

(一) 山門施食会(孟蘭盆会) 回向『諸回向清規式』では「施餓鬼七月十五日」に作り、『小叢林略清規』では「孟蘭盆会回向七月十五」に作る。

(二) 山門『諸回向清規式』・『小叢林略清規』ともに、「某門」に作る。

救苦之日『諸回向清規式』では「救苦之日預於斯日」に作る。

(四) 大悲円満無礙神呪、開甘露門、大仏頂万行首楞嚴神呪(觀音普門品)『諸回向清規式』・『小叢林略清規』ともに、『大仏頂万行首楞嚴神呪』とする。

(五) 果海無量聖賢『諸回向清規式』では「果海聖賢」に作り、『諸回向清規式』では「国界家」に作る。

(六) 各々『諸回向清規式』・『小叢林略清規』ともに、「各々」に作る。

*

仏身は法界に充満して、普く一切の群生の前に現ず、縁に随い感に赴いて周からずということ摩し、而も常に此の菩提の座に処したもう。

仰ぎ冀わくば、洪慈、俯して昭鑑を垂れたまえ。

山門今月十五日、乃ち衲子自恣の辰にして、是れ孟蘭盆救苦の日なり。

嚴かに六味の妙供を備え、謹んで現前の清衆を集め、聖号を称揚し、祕呪を課持し、今満散に当たつて、同

音に大悲円満無礙神呪、開甘露門、大仏頂万行首楞嚴神呪（観音普門品）を誦誦す。

鳩むる所の善利は、仰いで十方常住の三宝、果海無量の聖賢を讃え、護法の列位、諸天の仙衆、地界水界、大小の明霊、総じては日本国内、一切の明霊、一切の権現、三界の万霊、十方の至聖に祝献す。

茲の善利に憑つて、普く用いて回嚴す。次に冀わくば、尽祠堂内の各々靈位、同じく法味を受け、以て仏祖の化門を護り、各々威光を増して、国家の災障を除かんことを。

専ら祈るらくは、各人多生の父母、歴劫の冤親、一切の幽霊、河沙の餓鬼に資薦し、咸く迷衢を出でて、同じく覺路に登らんことを。

十方三世一切の諸仏、諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅蜜。

*

仏身はすべての世界に充ち満ちて、等しくすべてのいきものの前に姿をあらわします、

「仏の」機縁にしたがい、「すべての人びとの」思い（や悩み）に駆けつけ、「その神通力は」すべてにいきわたらないということはなく、しかも、つねにこの金剛宝座（すなわち仏がお座りになるところ）にとどまつておられます。

大いなる慈悲もて、どうか「わたしたちを」ご照覧ください。

当山では、今月十五日は、自らが互いに自己の犯した罪を告白し、懺悔して許しを乞う日であり、「すべてのいきものを」盂蘭盆の苦しみから救う日です。厳かに六種の味のすばらしい供物をそなえ、つつしんで目の前の清浄な僧たちを集め、「仏の」名号を賛嘆し、秘呪を誦持し、今この日の満了にあたつて、声をそろえて『大悲円満無礙神呪』『開甘露門』『大仏頂万行首楞嚴神呪』（『観音普門品』）をお唱えします。（名号

の賛嘆や秘呪ダラニの誦持などによつて」集められた功德は、つつしんで世界中の常住なる「仏・法・僧」の三宝、

「修行を終えた」悟りの境地にある無量なる僧侶たちを讃え「るとともに」、仏法を護る神々、諸天の仏たち、地上・水中・陸海の大小の精霊たち、すべて集めては、日本国内のすべての精霊たち、すべての神々、「欲界・色界・無色界の」三界のすべての霊、世界中の智慧が最高な方々に祈り捧げるものであります。この功德によつて広く回向して厳かに整えます。次に願うことには、祠堂内すべての各々靈位が、共に仏法の奥深い教えを受けて仏祖の化門おしえを護り、各々が、輝かしい光を増して、国家の災いやさまざまなたげを除き去り、「この世界を」清めますように。ひたすらに願うことは、各々の過去世「において生み育ててくれた全て」の父母、「過去世からの」永きにわたつて怨みを持つ者や親しい者、すべての死者の靈魂、無量無数の飢餓に苦しむものに手向けて、すべてみな迷いの世界を抜け出し、ともに覺りの路に登ることができるよう。

世界中の、そして過去・現在・未来という三世の一切の諸もろの仏がたよ、諸もろの尊き菩薩がたや修行者たちよ、偉大なる完成された最高の智慧よ。「この功德が成就しますように。」

*

(一) 仏身 〓 「仏陀の身」(『禪字』p.1087)、「仏の肉身のこと。仏の身体」(『中村』p.1194)。「仏身充滿於法界……而常處此菩提座」について、『大方広仏華の嚴經』卷六「如来現相品二」に同文が見える。「勝音菩薩、蓮華の台に坐し、諸の菩薩衆は蓮華の鬚に坐す。各其の上に於いて次第に坐す。其の一切の法において、勝音菩薩、深き法界を了り、大歡喜を生ず。仏の行ずる所に入り、智に疑滞無く、測るべからざる仏の法身の海に入り、一切の刹の諸の如来の所に住きて、身の諸毛孔において悉く神通を現す。念念に普く一切の法界を觀、十方の諸仏、共に其の力を与う。普く一切の三昧に安住せしめ、尽く未來劫、常に諸仏を見ゆ。無辺の法界、功德の海の身、乃至一切の三昧解脱、神通變化、即ち衆中に於いて、仏の威神を承し、十方を觀察して、而して頌を説いて曰く、

『仏身は法界に充滿し、普く一切の群生の前に現れ、縁に随い感に赴いて周ねからざるは靡きも而も恒に此の菩提の座に処す。……普く衆生の為に大光を放ち、各雨は法雨もて其の心を称す』と(『勝音菩薩、坐蓮華台、諸菩薩衆坐蓮華鬚。各於其上次第而坐。其一切法、勝音菩薩、了深法界、生大歡喜。入仏所行、智無疑滯、入不可測仏法身海、往一切刹諸如來所、身諸毛孔悉現神通。念念普觀一切法界、十方諸仏、共与其力。令普安住一切三昧、尽未來劫、常見諸仏。無辺法界、功德海身、乃至一切三昧解脫、神通變化、即於衆中、承仏威神、觀察十方、而説頌曰、仏身充滿於法界 普現一切衆生前 隨縁赴感靡不周 而恒処此菩提座……普為衆生放大光 各雨法雨称其心』)(T10-29c~30a)、すなわち勝音菩薩の説いた頌の一部である。そして『大慧普覺禪師語録』卷十五、ある僧が忠(『南陽慧忠』)国師に問う場面、「古徳云く、『青青たる翠竹は尽く是れ真如、鬱鬱たる黄花は般若に非ざる無し』と。有る人は許さず、『是れ邪説なり』と。亦た有る人は信じて云う、『不思議なり』と。若為なるかを知らず」に対して、忠国師は「此れは蓋し普賢文殊の境界にして、諸の凡小にして能く信受するには非ず。皆な大乘了義經の意と合す。故に『華嚴經』に云く、『仏身は法界に充滿し、普く一切の群生の前に現れ、縁に随い感に赴いて周ねからざるは靡きも而も恒に此の菩提の座に処す』と。翠竹は既に法界を出でず、豈に法身に非ざらんや」と答え(僧問忠国師、古徳云、青青翠竹尽是法身、鬱鬱黄花無非般若。有人不許、云是邪説。亦有信者云、不思議。不知若為。国師曰、此蓋普賢文殊境界、非諸凡小而能信受。皆与大乘了義經意合。故華嚴經云、仏身充滿於法界 普現一切群生前 隨縁赴感靡不周 而恒処此菩提座。翠竹既不出於法界、豈非法身乎。)(T47-875a)、また、『祖堂集』卷三、「(僧)又た問う、古徳曰く、『青青たる翠竹は尽く是れ真如、鬱鬱たる黄花は般若に非ざるは無し』と。有る人は許さず、『是れ邪説なり』と。亦た有る人は信じて云う、『不思議なり』と。若為なるかを知らず。師曰く、此れは蓋し普賢文殊大人の境界にして、諸の凡小にして能く信受するには非ず。皆な大乘了義經の意と合す。故に『華嚴經』に云く、『仏身は法界に充滿し、普く一切の群生の前に現れ、縁に随い感に赴いて周ねからざるは靡きも而も恒に此の菩提の座に処す』と。翠竹は既に法界を出でず、豈に法身に非ざらんや(又問、古徳曰、青青翠竹尽是真如、鬱鬱黄花無非般若。有人不許、是邪説。亦有人信言、不可思議。

- 不知若為。師曰、此蓋是普賢文殊大人之境界、非諸凡小而能信受。皆与大乘了義經意合。故華嚴經云、仏身充滿於法界 普現一切群生前 隨緣赴感靡不周 而恒処此菩提座。翠竹既不出於法界、豈非法身乎」とあり、どちらも『華嚴經』の經文として同文が見える一方、『碧巖錄』第九十七則「金剛經輕賤」では、「古人道く、『青青たる翠竹は尽く是れ真如、鬱鬱たる黃花は般若に非ざる無し』と。若し見得徹し去らば、即ち是れ真如。忽し未だ見得せずんば、作麼生か喚んで真如と作さん。『華嚴經』に云く、『若し人、三世一切の仏を了知せんと欲せば、応に法界の性は一切唯心の造なることを觀ずべし』と（古人道、青青翠竹尽是真如、鬱鬱黃花無非般若。若見得徹去、即是真如。忽未見得、且道作麼生喚作真如。華嚴經云、若人欲了知三世一切仏 応觀法界性一切唯心造」(T48:220c) とあり、同じ『華嚴經』でありながら、「若人欲了知三世一切仏 応觀法界性一切唯心造」の經文を引用している。ちなみに、『禪林象器箋』第十七類 諷唱門 章・「嘆靈」条には、「旧説に曰く、『亡俗回向の首語を嘆靈と言ふ、淨極光通達 寂照含虚空』と、是れなり。忠曰く、『嘆仏嘆真、其の義自存せり、亡俗の如きは則ち仏祖に例して以て其の徳を嘆ずべからざるなり。唯だ善を修し仏徳を憑みて、而して其の靈を拔濟するのみ。何ぞ靈徳を嘆ずるに用いん。故に施食法の回向の首語の如く曰いて、仏身充滿於法界 普現一切群生前、淨極光通達 寂照含虚空、是也。忠曰、嘆仏嘆真、其義自存矣、如亡俗則不可例仏祖以嘆其徳也。唯修善憑仏徳、而拔濟其靈耳。何用嘆靈徳。故如施食法回向首語曰、仏身充滿於法界 普現一切群生前、豈は嘆亡靈徳者哉。故予謂、嘆靈之目杜撰也」(卷十三・83b-84a)とし、嘆仏と嘆靈の違いを述べる。なお、『幻住庵清規』卷一、「世範」条にあつては、「国忌回向」(X63:578a)・「為病人解釈念誦」(X63:585b)に同文が見える。
- (2) 充滿Ⅱ「みちていること。みちみちた、の意」(『中村』p.664)。
- (3) 法界Ⅱ訳注④「本尊回向」の注(30)「法界」条を参照。
- (4) 群生Ⅱ訳注④「本尊略回向」の注(8)「群生」条を参照。
- (5) 随縁Ⅱ「因縁に随順する。機縁に随う。機根の縁に應じる」(『禪学』p.627)。

- (6) 赴 Ⅱ「①でかける②駆けつける③身を投げる④加わる⑤志望を急ぎ知らせる」(『漢辞海』p.1386)。
- (7) 処 Ⅱ「居住する、留まる、家にいる、つきあう」(『漢辞海』p.158)。
- (8) 菩提座 Ⅱ「菩提」は「梵／巴 bodhi 意識道・覚・智」(『禅学』p.1151)、「ちとり。正智のはたらき。さとの智慧。迷いから目覚めること。智慧のはたらきによって無明がなくなつた状態」(『中村』p.1221～1222)。「菩提座」は「金剛宝座の意」(『中村』p.1222)。
- (9) 洪慈 Ⅱ「洪」は「大きな、大いなるの意」(『漢辞海』p.82)。「洪慈」は「大いなる仏祖の慈悲の意」。
- (10) 昭鑑 Ⅱ訳注③「祖師遠忌回向」の注(5)「昭鑑」条を参照。
- (11) 山門 Ⅱ訳注④「本尊回向」の注(23)「山門」条を参照。
- (12) 衲子 Ⅱ「禅僧のこと。衲衣を着した僧の意。衲僧」(『禅学』p.1008)、「衲はもと、ぼろきれを補修してつくつた衣を意味し、袈裟のこと。子は者の意。修行僧。普通、禅僧が自分をさすときに用いる」(『中村』p.1089)。
- (13) 自恣 Ⅱ「欲するがままに得ること。安居が終わつた最終の日に、修行僧らが互いに自己の犯した罪を告白し、懺悔して許しを乞ふこと。旧律では七月十五日、新律では八月十五日に行う」(『中村』p.552)。
- (14) 盂蘭盆 Ⅱ「インドの俗語 ullambana の音訳で、倒懸(やかやまに懸る)の意の梵語 avalambana の訛といわれ、死後さかさに吊されるような苦しみを救うために行う祭儀とされる。盂蘭盆の典拠となる『盂蘭盆経』によると、仏弟子目犍連の母が生前の罪業のために、七月十五日の自恣(夏安居の解散式)の日に、百味の飲食を衆僧に供養し、また餓鬼に施すところの施餓鬼会を催し、その功德によつて七世の父母の餓鬼界における苦しみ、および次世の父母の苦悩が除かれるとしている」(『禅学』p.38)、「日本では斉明天皇三年(六五七)以来行われている。江戸時代には七月十三日から十五日までを盂蘭盆とした。農閑期の都合から、ある地方では旧暦によつて行い、関西地方などでは、八月の同日に行う」(『中村』p.30)。「盂蘭盆会」については、『禅林象器箋』「第十六類 報褥門」章・「盂蘭盆会」条に、「七月十五日、僧自恣の時、当に七世の父母、及び現在の父母、扈難中の者の為に飯百味五果、汲灌の盆器、香油挺燭、床敷臥を具え、世の甘美を尽くして、以て盆の中に著けて十方の

大德修僧に供養すべし。此の日に当たりて、一切の聖衆、或いは山間に在りて禪定し、或いは四道果を得、或いは樹下に在りて経行し、或いは六通自在にして声聞縁覺を教化す。或いは十地の菩薩大人（『仏や菩薩』權りに比丘と現じて大衆の中に在りて、皆同一心に鉢和羅飯を受く。清淨戒を具する聖衆の道、其の德汪洋たり（七月十五日、僧自恣時、當為七世父母、及現在父母、屢難中者具飯百味五果、汲灌盆器、香油挺燭、床敷臥具、尽世甘美、以著盆中供養十方大德衆僧。當此之日、一切聖衆、或在山間禪定、或得四道果、或在樹下経行、或六通自在教化声聞縁覺。或十地菩薩大人權現比丘在大衆中、皆同一心受鉢和羅飯。具清淨戒聖衆之道、其德汪洋」（卷十三・24a-b）とある。なお、『盂蘭盆會』は「施食會」とも称されるが、『禪林象器箋』第十九類 喪薦門」章・「施食法」条に、『勅修清規』月分須知に云く、『七月十五日、晚盂蘭盆會を設く、諷經施食（又た施餓鬼食の処に見ゆ）』と。『幻住庵清規』に普施法食の文を載す。日本禪林行ずる所と異なるなり。『救拔焰口餓鬼經』に云く、『阿難独り静処に居す、中夜忽ち一の餓鬼を見ゆ。名を焰口と曰い、口中火燃え、咽針鋒の如し。阿難に白して言わく、「汝三日の後、我が趣中に死せん。」阿難惶怖して問う、「何の方便かあらん」餓鬼答えて言わく、「汝明日若し能く百千那由多恒河沙数の餓鬼、並びに百千の婆羅門仙等に布施し、摩伽陀国所用の斛を以て各一斛の飲食を施し、並びに及んで我が為に三宝を供養せば、汝寿を増すを得、我をして餓鬼の苦を離れせしめて、天上に生ずるを得ん」阿難仏に白す、仏阿難に告ぐ、「怖れる勿れ、我能く方便せん、陀羅尼有り、名づけて『無量威德自在光明勝妙力』と曰う。即ち能く俱胝那由他、百千恒河沙数の餓鬼及び婆羅門仙等に上妙の飲食を充足して、一一皆摩伽陀国所用の斛、七七斛の食を得ん。能く彼の衆に食せしめて、苦身を解脱して、天上に生ずるを得ん。阿難、汝今受持せば、福德寿命、皆増長することを得ん。」陀羅尼を説いて曰く、「曩謨薩縛。佉摩路。嚩路枳帝。唵三跋羅三跋羅吽」仏阿難に告ぐ、「若し人長寿福德増榮を求めて檀波羅蜜を満足せんと欲せば、毎晨朝、及び一切時に於いて悉く障礙無し、一の淨器を取りて、盛るに淨水を以て少飲麴、及び餅飯等を置きて、右手に器を按じ、前の陀羅尼誦すこと七遍（云云広説、具さに引く能わず）」と（敕修清規月分須知云、七月十五日、晚設盂蘭盆會。諷經施食（又見施餓鬼食處）。幻住庵清規載普施法食文。与日本禪林所行異也。

救拔焰口餓鬼經云、阿難独居静处、中夜忽見一餓鬼。名曰焰口、口中火然、咽如針鋒。白阿難言、汝三日後、死我趣中。阿難惶怖、問何方便。餓鬼答言、汝於明日若能布施百千那由他恒河沙數餓鬼、並百千婆羅門仙等、以摩伽陀国所用之斛各施一斛飲食、並及為我供養三宝、汝得增壽、令我離於餓鬼之苦、得生天上。阿難白仏、仏告阿難、勿怖、我能方便、有陀羅尼、名曰無量威德自在光明勝妙力。即能充足俱胝那由他、百千恒河沙數餓鬼及婆羅門仙等上妙飲食、一一皆得摩伽陀国所用之斛、七七斛食。能食彼衆、解脫苦身、得生天上。阿難、汝今受持、福德壽命、皆得增長。說陀羅尼曰、曩謨薩縛。怛佉孽跢。嚩路枳帝。唵三跋羅三跋羅吽。仏告阿難、若人欲求長壽福德增榮滿足檀波羅蜜、每於晨朝、及一切時悉無障礙、取一淨器、盛以淨水、置少飲麴、及餅飯等、右手按器、誦前陀羅尼七遍（云云広説不能具引）（卷十四・61b～62b）とある。また「施食」についても同じく『禪林象器箋』「第十九類 喪薦門」章・「施餓鬼食」条に「施食具さには施餓鬼食と言う。『釈門正統』に云く、『若し夫れ施食の法は、又た一切の天人の知る所に非ず、惟だ如来、大慈を以て普覆、一切の含靈、其の飢餓苦悩を受けるに忍びず、故に面然鬼王の縁起を仮りて、阿難尊者をして一搏食を以て呪を誦して之を施さしむ。今緇素通じ行なう。之を施餓鬼食と謂う。経律に出ず所、三の不同有り。一に『涅槃經』に之を曠野鬼と謂い、二に『焰口經』に之を焰口鬼と謂い、三に『鼻奈耶律』に之を訶利帝母と謂う、皆如来の善權示迹に由りて、後の学者をして、依りて之を行ぜ俾む、其の行ずる所を觀るに、力を用いること甚約に、功を取むること甚だ博し。夫の靈輒戈を倒にし、漂母返哺の儔を回視するに、誠に天淵の間有り、所謂曠野鬼並びに訶利帝母は、今仏弟子たるもの食う毎に必ず生飯を出すは是れなり。所謂焰口鬼及び婆羅門仙は、今仏弟子たるもの、至心に弁ずる所の斛食を云うものは是れなり（施食具言施餓鬼食。釈門正統云、若夫施食之法、又非一切天人所知、惟如来、以大慈普覆、不忍一切含靈、受其飢餓苦悩、故仮面然鬼王縁起、令阿難尊者以一搏食誦呪施之。今緇素通行。謂之施餓鬼食。経律所出、有三不同。一涅槃經謂之曠野鬼、二焰口經謂之焰口鬼、三鼻奈耶律謂之訶利帝母、皆由如来善權示迹俾後之学者、依而行之、觀其所行、用力甚約、收功甚博。回視夫靈輒倒戈、漂母返哺之儔、誠有天淵之間、所謂曠野鬼並訶利帝母者、今為仏弟子每食必出生飯者是也。所謂焰口鬼及婆羅門仙者、今為仏弟子、至心所弁斛食者

是也) (卷十四・62a~63a) とあり、さらに、『禪林象器箋』第十九類 喪薦門」章・「開甘露門」条では、「施食法を亦た開甘露門と曰う(施食法亦曰開甘露門)」(卷十四・63a~b) とある。

- (15) 六味 詁注⑤ 「喫齋偈」の注(3) 「三徳六味」条を参照。
- (16) 現前 詁注③ 「祖師遠忌回向」の注(11) 「現前」条を参照。
- (17) 清衆 詁注⑥ 「修正会回向」の注(5) 「清衆」条を参照。
- (18) 称揚 詁注③ 「尊宿山頭念誦」の注(13) 「称揚」条を参照。
- (19) 聖号 詁注③ 「尊宿山頭念誦」の注(14) 「聖号」条を参照。
- (20) 課持 詁注③ 「課」は①試験する。こころみる②成績を評定する③割り当てた仕事の完成を督促する④要求する⑤習う⑥税として割りあてる(『漢辞海』p.1338~1339)。
- (21) 秘呪 詁注③ 「秘密呪」のこと。詁注④ 「普回向①」の注(4) 「楞嚴秘密呪」条を参照。
- (22) 滿散 詁注⑥ 「修正滿散会回向」の注(10) 「滿散」条を参照。
- (23) 諷誦 詁注③ 「祖師遠忌回向」の注(12) 「諷誦」条を参照。
- (24) 善利 詁注④ 「火徳鎮守回向」の注(4) 「善利」条を参照。
- (25) 果海 詁注④ 「本尊回向」の注(6) 「果海」条を参照。
- (26) 聖賢 詁注④ 「本尊回向」の注(7) 「聖賢」条を参照。
- (27) 祝猷 詁注④ 「本尊回向」の注(8) 「祝猷」条を参照。
- (28) 列位 詁注④ 「本尊回向」の注(9) 「列位」条を参照。
- (29) 仙衆 詁注④ 「本尊回向」の注(10) 「仙衆」条を参照。
- (30) 地界水界 詁注⑥ 「修正滿散会回向」の注(27) 「地界水界」条を参照。
- (31) 明霊 詁注④ 「韋駄天回向」の注(9) 「明霊」条を参照。
- (32) 権現 詁注④ 「仏が衆生済度のために現世に化現すること。仏・菩薩が仮に神として垂迹の化身を日本に現したとい

う本地垂迹の説によつた神がみの称」(『禪学』p.364)、「權化・応現・示現ないふこと」(『中村』p.433)。

(33) 至聖 〓 訳注④ 「祠堂回向」の注(6)「至聖」条を参照。

(34) 回嚴 〓 訳注④ 「火徳鎮守回向」の注(5)「回嚴」条を参照。

(35) 祠堂 〓 訳注④ 「祠堂回向」の注(5)「祠堂」条を参照。

(36) 法味 〓 「仏法の妙味、また妙味ある仏法」(『禪学』p.1143)、「真理の本質」(『中村』p.583)。

(37) 仏祖 〓 訳注③ 「尊宿山頭念誦」の注(17)「仏祖」条を参照。

(38) 門 〓 「入口。また出入をいう。区限。同じ法系や家風に属する範囲の称」(『禪学』p.1229)。

(39) 威光 〓 「みいず。たけき光。威力」(『中村』p.33〜34)。

(40) 障 〓 「とりで。しきり。じやまもの。やこへかえ」(『漢辞海』p.1547)。

(41) 資薦 〓 「資はたすける、あたえる。薦はすすめる。手向けてまへへいふ」(『禪学』p.441)。「禪苑清規」卷七

「亡僧」条に、「塔前十念」詞に云く、切に以んみれば、歿故某人、既に縁に随いて順叙す。乃ち法に依りて茶毗す。百年の弘道の身を焚き、一路涅槃の径に入る。仰いで尊衆に憑みて、覺靈を資助す。乃ち十念を称し、罷りて云く、上來聖号を称揚し、往生を資薦す。惟だ願わくは、慧鏡分輝し、真風彩を散ち、菩提の園裏に覺意の花を開敷し、法性海中に塵心の垢を蕩滌し、茶三奠を傾け、香一炉に薫かん。用薦雲程、和南聖衆(塔前十念詞云、切に歿故某人、既隨縁順寂。乃依法以茶毗。焚百年弘道の身、入一路涅槃之径。仰憑尊衆資助覺靈。乃称十念、罷云、上來称揚聖号、資薦往生。惟願、慧鏡分輝、真風散彩、菩提園裏開敷覺意之花、法性海中蕩滌塵心之垢、茶傾三奠、香爇一炉。用薦雲程、和南聖衆)」(X63-541c)とある。

(42) 多生 〓 「罪障深くしていくたびも生死を繰り返す身。六道輪廻の生」(『禪学』p.364)。「多生父母、歴劫怨親」については、『増修教苑清規』卷二「安居門第七」章「蘭盆会」に「某路某寺住持比丘某と比丘衆 七月十五日、伏して目連大士救親の辰に値う。預じめ半月に懺法を熏修し、經文を諷誦して楽邦の聖号を繫念し、茲に満散に盂蘭盆を修設し、常住の三宝、十方の衆僧に供養す。集むる所の殊助は生身の父母、歴劫の怨親、法界の

含靈に答報し、同じく淨域に生ずる 伏して以んみれば、乾を父と称し坤を母と称す。誠に覆燾の偏ならざる。

仏尊むべく法師とすべく、謂く依歸の託有り、諸子塗炭に厄窮し、至人塵凡に利樂す。皇覺博濟の心を推し、物機遍く赴く。青提倒懸の苦を抜き、緣感斯こに彰し、教百世の余に伝う。時七月の望に届いて、秋風乍起たちまこる。遊子の念を悲しむ。故郷の白雲孤飛して吾が親其の下に含いうを想う。況んや霜露沾濡して、而して既に降り、乃ち君蒿悽愴以て堪え難く、生じて三年、懷に免ず。豈に勝れて言わんや。一日其の力を用いる有り、孰か報うを擬せん。蘭盆供設の殮を奉じて、蓮社懺摩の法を行う。要期昔に在り、志を今に剋す。伏して願わくは、我等多生の父母、歷劫の怨親、愛河千尺の狂瀾を枯して、余滴を留めず。性空一輪の帰月を淨して、高く重輝を朗す。若しくは没し、若しくは存し、常に安じ常に樂す。謹んで疏す。 某年七月 日疏(某路某寺住持比丘某比丘衆七月十五日、伏値目連大士救親之辰。預於半月薰修懺法、誦誦經文繫念衆邦聖号、茲者滿散修設盂蘭盆、供養常住三宝、十方衆僧。所集殊助答報生身父母、歷劫怨親、法界含靈、同生淨域者 伏以、乾称父坤称母。誠覆燾之不偏。仏可尊法可師、謂依歸之有託、諸子厄窮於塗炭、至人利樂於塵凡推。皇覺博濟之心、物機遍赴。拔青提倒縣之苦、緣感斯彰、教伝百世之余。時届七月之望、秋風乍起。悲遊子念。故郷白雲孤飛想吾親舍其下。況霜露沾濡、而既降、乃君蒿悽愴以難堪、生三年、免于懷。豈勝言者。有一日用其力、孰擬報乎。奉蘭盆供設之殮、行蓮社懺摩之法。要期在昔、尅志于今。伏願、我等多生父母、歷劫怨親、枯瓮河千尺之狂瀾、不留余滴。淨性空一輪之帰月、高朗重輝。若没、若存、常安常樂。謹疏。某年七月 日疏) (X57-336b-c) に見える。

(43) 父母 = 「父と母。自己の本源」(『禅学』p.1097)。

(44) 歷劫 = 「りゃっこうとも。永遠の時を經過すること。劫 (kalpa 劫波) は長年月。永い時間」(『禅学』p.1269)、「幾多の長い生涯を經つ修行すること」(『中村』p.1421)。

(45) 冤親 = 「自分を害する者と自分を愛してくれる者」(『中村』p.136)。ちなみに、『禅学』では、「怨親平等」として「怨憎する人人に対しても、親愛する人人に対しても、差別することなく、慈悲愛護の念をもつて接すること。慈悲喜捨の四無量心を修し、最後の捨心に至って、怨親平等が実現される」(p.131) とある。

- (46) 幽霊＝「死者の靈魂の意」（『禪字』p.1246）「亡魂・亡靈に同じ。禪宗で、比丘尼の死後、法名の底字として用いることがある」（『中村』p.1386）。
- (47) 河沙＝「恒河沙の略。ガングジス河の砂。無量数を示す」（『禪字』p.158）。
- (48) 餓鬼＝「梵 preta／巴 Peta 音訳薛荔多。三惡趣・四惡趣・六趣の一。前生に慳貪嫉妬をもって、身・口・意の惡行をした報いとして趣くところとされ、常に飢渴に苦しむところからこの名がある」（『禪字』p.149）。「鬼は死者のたましいのこと。恐ろしいものを意味しない。餓はつけたりの字である。古代インドでは祖靈のことを preta（逝きし者）とよび、それは子孫の供え物（食物など）を期待していると考えられていた。この觀念が仏教にとり入れられ、飢えて食物を待つ死者と考えられた。六道の一つの餓鬼道に住む者。惡業の報いとして餓鬼道に墮ちた亡者。飢餓に苦しむ者。福德のない者が陥り、常に飢え・渴き・苦しみに悩まされて、たまたま食物を得ても、これを食べようとすると、炎が発して食べることができないといわれる」（『中村』p.162）。
- (49) 衢＝「四方八方に通じる道路。みち」（『漢辭海』p.1289）。
- (50) 覺路＝訳注①「龜前念誦」の注（8）「薦清魂於覺路」条を参照。
- (51) 十方三世一切諸仏…摩訶般若波羅蜜＝訳注①「鎖籠」[起籠]「仏事」の注（4）「十方三世一切諸仏…摩訶般若波羅蜜」条を参照。

小 施 食 会 回 向（施食略回向）（一）

（『臨濟宗勤行聖典』第二卷「年分諷經」p.215～217『諸回向清規式』卷一・諸回向之部「施食略通回向」27b～28a・T81-633c『小叢林略清規』卷下「施食略回向」T81-716a・「禪文化本」p.183～184/p.315a

上來稱揚聖号、課持祕呪諷誦。⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾⁽⁵⁾⁽⁶⁾

大悲円満無礙神呪、開甘露門⁽²⁾、所集功德奉為。⁽⁷⁾

(法名) (各々) 靈位、有緣無緣⁽³⁾、三界万靈、十方至聖、伏願。⁽⁸⁾

資薦各人多生父母、歷劫冤親、一切幽靈、河沙餓鬼、咸出迷衢⁽¹⁷⁾、同登覺路。⁽¹⁸⁾

十方三世一切諸仏、諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅蜜。⁽¹⁹⁾

- (一) 小施食会回向 、『諸回向清規式』では「施食略通回向」に作り、『小叢林略清規』では「施食略回向」に作る。
- (二) 大悲円満無礙神呪、開甘露門 、『諸回向清規式』・『小叢林略清規』ともに、『大悲円満無礙神呪』のみを挙げ
- る。
- (三) (法名) (各々) 靈位、有緣無緣 、『諸回向清規式』では「某名」に作り、『小叢林略清規』ではこの箇所
- を欠く。

*

上來、聖号を稱揚し、祕呪を課持し、大悲円満無礙神呪、開甘露門を諷誦す。集むる所の功德は、(法名) (各々) 靈位、有緣無緣の三界万靈、十方の至聖の為にし奉る。伏して願わくば、各人多生の父母、歴劫の冤親、一切の幽靈、河沙の餓鬼に資薦し、咸く迷衢を出でて、同じく覺路に登らんことを。十方三世一切の諸仏、諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅蜜。

*

これまで名号を賛嘆し、秘呪^{ダラニ}を誦持し、『大悲円満無礙神呪』『開甘露門』を誦致しました。（「それによつて」集められた功德は、（法名（各々）の靈魂、有縁無縁の「欲界・色界・無色界の」三界のすべての靈、世界中の智徳が最高な方々のために捧げるものであります。伏して願うことには、各々の過去世（において生み育ててくれた全て）の父母、（過去世からの）永きにわたつて怨みを持つ者や親しい者、すべての死者の靈魂、無量無数の飢餓に苦しむものに手向けてまつり、すべてみな迷いの世界を抜け出して、ともに覺りの路に登ることができるよう。）

世界中の、そして過去・現在・未来という三世の一切の諸もろの仏がたよ、諸もろの尊き菩薩がたや修行者たちよ、偉大なる完成された最高の智慧よ。（「この功德が成就しますように。」）

*

- (1) 上来^ニ訳注③「尊宿山頭念誦」の注(12)「上来」条を参照。
- (2) 称揚^ニ訳注③「尊宿山頭念誦」の注(13)「称揚」条を参照。
- (3) 聖号^ニ訳注③「尊宿山頭念誦」の注(14)「聖号」条を参照。
- (4) 課持^ニ本訳注「山門施食会（孟蘭盆会）回向」の注(20)を参照。
- (5) 秘呪^ニ「秘密呪」のこと。訳注④「普回向①」の注(4)「楞嚴秘密呪」条を参照。
- (6) 諷誦^ニ訳注③「祖師遠忌回向」の注(12)「諷誦」条を参照。
- (7) 功德^ニ訳注③「茶毘回向」の注(4)「功德」条を参照。
- (8) 至聖^ニ訳注④「祠堂回向」の注(6)「至聖」条を参照。
- (9) 資薦^ニ本訳注「山門施食会（孟蘭盆会）回向」の注(41)を参照。
- (10) 多生^ニ本訳注「山門施食会（孟蘭盆会）回向」の注(42)を参照。

- (11) 父母〓本詁注「山門施食会(孟蘭盆会) 回向」の注(43)を参照。
- (12) 歷劫〓本詁注「山門施食会(孟蘭盆会) 回向」の注(44)を参照。
- (13) 冤親〓本詁注「山門施食会(孟蘭盆会) 回向」の注(45)を参照。
- (14) 幽靈〓本詁注「山門施食会(孟蘭盆会) 回向」の注(46)を参照。
- (15) 河沙〓本詁注「山門施食会(孟蘭盆会) 回向」の注(47)を参照。
- (16) 餓鬼〓本詁注「山門施食会(孟蘭盆会) 回向」の注(46)を参照。
- (17) 衢〓本詁注「山門施食会(孟蘭盆会) 回向」の注(49)を参照。
- (18) 覺路〓詁注①「龕前念誦」の注(8)「薦清魂於覺路」を参照。
- (19) 十方三世一切諸仏…摩訶般若波羅蜜〓詁注①「鎖龕〔起龕〕仏事」の注(4)「十方三世一切諸仏…摩訶般若波羅蜜」条を参照。

達磨忌回向(一)

〔臨濟宗勤行聖典〕第二卷「年分諷經」p.226～229『諸回向清規式』卷一・諸回向之部「達磨忌宿忌半齊」30a・T81-634a～b、『小叢林略清規』卷下「達磨忌回向」T81-716c・「禪文化本」p.184～185/p.316a～b、〔江湖法式梵唄抄〕p.184～185

浄法界身本無出沒、大悲願力示有去來⁽¹⁾。

仰冀真慈、俯垂昭鑑⁽⁶⁾。

⁽⁷⁾

山門⁽⁸⁾ 三 今月初五日伏値、初祖菩提達磨円覚大師大和尚、示寂之辰⁽⁹⁾。

虔備香華灯燭、茶菓珍饈⁽¹¹⁾、以伸供養⁽¹²⁾。

仍集合山比丘衆同音諷誦⁽¹³⁾。

大仏頂万行首楞嚴神呪、所集殊勳、上酬慈蔭⁽¹⁴⁾、伏願⁽¹⁵⁾。

不捨悲心、憫三界六凡之衆、再来末世⁽¹⁶⁾、現一花五葉之春⁽¹⁷⁾。

十方三世一切諸仏、諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅蜜⁽¹⁸⁾。

宿忌の場合は、「示寂之辰」の次に、「預於斯晚」（預め斯の晩に於いて）を加え、「茶菓珍饈」を「茶湯之儀」（茶湯の儀）に改め、「同音」を除く。

（一）達磨忌回向 、『諸回向清規式』では「達磨忌宿忌半齊」に作り、さらに割り注の形で、「十月初五日塔頭用之本寺皆用疏」の十四字が入る。『小叢林略清規』では「達磨忌回向」に作り、さらに割り注の形で「十月五日」の四字が入る。 （二）『諸回向清規式』では「示現去来」に作る。 （三）山門 、『諸回向清規式』・『小叢林略清規』ともに「某門」に作る。 （四）示寂之辰 、『諸回向清規式』では「示寂之辰」に続き、割り注の形で「預於斯晚宿忌用之」の八字が入る。 （五）菓珍饈 、『諸回向清規式』では「湯之儀」と「菓珍饈」を併記する。 （六）末世 、『諸回向清規式』では「末世」に作る。 （七）十方三世…… 、『小叢林略清規』では「十方云云」とし、回向文を挙げた後、「宿忌示寂之辰下加預於斯晚茶菓珍饈為茶湯之儀除同音両字」を追記する。

*

浄法界の身、本、出沒無し、大悲の願力、去来有ることを示す。

仰ぎ冀わくば、真慈、俯して昭鑑を垂れたまえ。

山門さんもん今月初五日こんげつしよごにち、伏ふして初祖菩提達磨しよそぼだいだるま円覚大師えんかくだいし和尚おしょう示寂じしやくの辰しんに値おう。

虔うやうやしく香華灯燭かうげうしよく 茶菓珍饈さかちんしゆうを備そなえ、もつて供養くようを伸のぶ。

仍よつて合山がつさんの比丘衆びくしゆを集あつめ、同音どうおんに大仏頂万行だいぶつちやうまんぎやうしゆ楞嚴神呪りやうおんじんしゆを誦ふじゆ誦すす。

集あつむる所の殊勲とくこうは、上かみ、慈蔭じいんに酬むくいんことを。

伏ふして願ねがわくば、悲心ひしんを捨すてず、三界さんがい六凡りくぼんの衆しゆを憫あわれんで、再ふたび末世まつせに來きたつて、一花五葉いつけごようの春はるを現あらわしたま

わんことを。

十方三世一切じつぽうさんぜいっさいの諸仏しよぶつ、諸尊菩薩摩訶薩しよそんぼさつまかさつ、摩訶般若波羅蜜まかはんにやはらみつ。

*

浄きよらかな法界ほふかいにおけるこの身は、もとより「生死しじを」出たり入ったりすることはありません。大いなる慈悲じの願力がんりき（衆生を救済しようと願う仏祖のはたらき）は、「生死しじの」往來わうらいが「假有仮滅かりいうかりめつという現象げんさうとして」あることを示します。

仏祖の慈悲もて、どうか「わたしたちを」ご照覧しやうらんください。

当山とうざんでは、今月の五日、初祖菩提達磨しよそぼだいだるま円覚大師えんかくだいし和尚おしょうが亡くなられた時を迎えました。「敬意を込めて」恭うやうやしく香・華・灯燭・茶・菓子・ご馳走ちしうを供え、供養くよういたします。そこでこの寺に住むすべての僧侶らを集めて、声をそろえて『大仏頂万行首楞嚴神呪』をお唱えします。「こうした供養によつて」集めたすばらしい功德くどくは、「大師だいしの」慈悲に酬むくい奉るものであります。伏して願うことには、「大師におかれましては」慈悲の心を捨てず、「欲界・色界・無色界むしきかいの」三界のうちで六道りくどうを彷徨ほうかうう生きとし生けるものたちを憐れみ、再び末法の時代に生まれ來たつて、かつて禪宗の教えが花開いたように、仏の正法が花開く春はる（のよう）なす

ばらしい隆盛」をもたらしていただきますように。世界中の、そして過去・現在・未来という三世の一切の諸もろの仏がたよ、諸もろの尊き菩薩がたや修行者たちよ、偉大なる完成された最高の智慧よ。「この功德が成就しますように。」

*

(一) 浄法界身本無出沒 『浄法界』は「清浄法界の略。真如を指している」、「浄法界身」については『本無出沒』と二句一連として仏祖回向文に用いられる。清浄なる法界の身。仏祖の法身は平等常住で生死出沒のないことをいう(『禅学』p.236)。勅修百丈清規 卷二「報本章第三」章・「仏成道涅槃」条には、「成道会」において、「維那仏に白して云く、『正覚山前睹明星而悟道 大千界内揭慧日以流輝』と疏を宣べ畢りて、諷経、回向(維那白仏云、正覚山前睹明星而悟道 大千界内揭慧日以流輝 宣疏畢、諷経、回向)」、「涅槃会」において、「維那仏に白して云く、『浄法界身本無出沒 大慈願力示有去来』と疏を宣べ畢りて、諷経、回向(維那白仏云、浄法界身本無出沒 大慈願力示有去来 宣疏畢、諷経、回向) (T48-1116a~b) とある。同じく『勅修百丈清規』卷二「報本章第三」章・「百丈忌」条に、「初夜、回向」として「浄法界身本無出沒 大悲願力示有去来。仰冀慈悲俯垂昭鑑……」(T48-1180)とあり、「涅槃会」・「百丈忌」の際に唱えられていたことが分かる。また、『円悟仏果禅师語録』卷二に、「上堂して云く、『本来是れ仏、成と不成と無く、正体湛然。出と不出を離れ、本分事上に直得す、万里片雲無し、猶お未だ放過すべからず、更に什麼の諸余を説かん。其れ或いは機に随いて且く箇の出世と不出世を論ず。所以に道う、「浄法界の身、本、出沒無し、大悲の願力、生を受くるを示現す」と。且く道え、釈迦老子即ち今什麼の処に在る。只だ知る、事の目前を過ぐるを逐う、覺せず、老いて頭上より来たるを」と。下座(上堂云、本来是仏、無成不成、正体湛然。離出不出、本分事上直得、万里無片雲、猶未可放過、更說什麼諸余。其或隨機且論箇出世不出世。所以道、浄法界身本無出沒、大悲願力示現受生。且道、釈迦老子即今在什麼処。只知、事逐眼前過、不覺、老徒頭上来。下座) (T47-719b)とあり、ほぼ同じ文が見える。

- (2) 大悲＝梵／田 maha-karuna 偉大なる慈悲。衆生の苦を救済する仏菩薩の大慈悲心をいう。『禪学』p.84)。
- (3) 願力＝『織田』によれば「誓願の力」(p.369)。ちなみに『中村』は「大悲願力」として「一切衆生を救済しようという大慈悲の阿弥陀仏の本願力」と解釈している (p.927)。
- (4) 示＝「人につけて知らせる。人に見せる。はつきり表す。教える。導く」(『漢辞海』p.1025)。
- (5) 去来＝「行くことと去ること。往来。生じ滅すること。物を得ることと失うこと」(『禪学』p.234)。
- (6) 真慈＝訳注③「祖師遠忌回向」の注(4)「真慈」条を参照。
- (7) 昭鑑＝訳注③「祖師遠忌回向」の注(5)「昭鑑」条を参照。
- (8) 山門＝訳注④「本尊回向」の注(23)「山門」条を参照。
- (9) 初祖菩提達磨円覚大師＝また「達磨忌」として「達磨大師の忌日である十月五日に、禪宗寺院で行われる法会」(『中村』p.367)。「初祖菩提達磨」について、『仏祖統紀』巻二十九「諸宗立教志第十三」章・「達磨禪宗」条に「初祖達磨円覚禪師 二祖慧可大祖禪師禪師 三祖僧璨鏡智禪師 四祖道信大医禪師 五祖弘忍大満禪師 六祖慧能大鑑禪師 直指人心、見性成佛、至れるかな。斯れ吾が宗の觀心の妙旨なり。之教外別伝と謂うは、豈に果たして此れを外にして、教と為さんや。誠に此の道心を以て宗と為し、言説の相を離れるに由る、故に、強いて此の方便の談を為すのみ。然らずんば、何を以て楞伽を出示して教を覽て心を照らしめん。何を以て大乘の入道教に籍りて宗を悟らんと言わんや。此の宗に同じく為し、達磨禪宗志を撰す(教を覽、心を照らすは本志に見ゆ。教に籍りて宗を悟るは、達磨の入道四行に見ゆ)。初祖菩提達磨は南天竺の香至王子なり(初祖達磨円覚禪師 二祖慧可大祖禪師禪師 三祖僧璨鏡智禪師 四祖道信大医禪師 五祖弘忍大満禪師 六祖慧能大鑑禪師 直指人心、見性成佛、至矣哉。斯吾宗觀心之妙旨也。謂之教外別伝者、豈果外此為教哉。誠由此道以心為宗、離言説相、故、強為此方便之談耳。不然、何以出示楞伽令覽教照心耶。何以言大乘入道藉教悟宗耶。為同此宗撰達磨禪宗志(覽教、照心見本志。藉教悟宗、見達磨入道四行) 初祖菩提達磨。南天竺(香至王子)」(T49-290c～291a)とある。「円覚大師」の諡については、『禪林象器箋』「第六類 称呼門」章・「大師」条に、『伝灯録』

菩提達磨の章に云く、『師化縁已に畢り、伝法人を得るを以て端居、而して逝す。即ち後魏の孝明帝、太和十九年、丙辰の歳、十月五日也。代宗〈李唐の第九主〉円覚大師と諡す、塔に空観と曰う』と。『釈氏要覧』に云く、『師は範なり、大は小の言を簡ぶなり（伝灯録菩提達磨章云、師以化縁已畢、伝法得人端居而逝。即後魏孝明帝、太和十九年、丙辰歳、十月五日也。代宗〈李唐第九主〉諡円覚大師、塔曰空観。釈氏要覧云、師範也、大簡小之言也）』（卷五・82）とある。『初祖菩提達磨円覚大師』は、『勅修百条清規』卷二「尊祖章第四」章・「達磨忌」条の「上來念誦功德。奉為初祖菩提達磨円覚大師大和尚。上酬慈蔭。十方三世一切云云」（T86-118a）が初出である。

- (10) 示寂〓訳注③「祖師遠忌回向」の注(6)「示寂」条を参照。
- (11) 香華〓訳注③「祖師遠忌回向」の注(7)「香華」条を参照。
- (12) 珍饈〓訳注③「祖師遠忌回向」の注(9)「珍饈」条を参照。
- (13) 合山〓訳注③「祖師遠忌回向」の注(10)「合山」条を参照。
- (14) 諷誦〓訳注③「祖師遠忌回向」の注(12)「諷誦」条を参照。
- (15) 殊勳〓訳注③「尊宿山頭念誦」の注(13)「殊勳」条を参照。
- (16) 上酬慈蔭〓訳注④「伝燈祖師回向」の注(6)「上酬慈蔭」条を参照。
- (17) 悲心〓訳注③「尊宿山頭念誦」の注(20)「悲心」条を参照。
- (18) 三界六凡〓『禅学』では、「六凡四聖」〓「六種の凡夫界と四種の聖人界。六凡は六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上）のこと。四聖は声聞・縁覚・菩薩・仏をいう」（p.1320）、また「三界六道」〓三界（欲界・色界・無色界）と六道」（p.386）とある。『楞伽阿跋多羅宝経註解』卷四に、「大慧よ、略して心・意・意識及び習気を説くに、是れ五受陰の因なり。是の心・意・意識・習気は、凡と愚、善と不善の妄想を長養す。略して説くは、下に広説に対して言うなり。心識・習気は乃ち生死の因、五陰は乃ち生死の果なり。心識・習気の長養することゝを了らざるに由りて、故に三界六凡、有漏の妄想利那有り、善と不善と即ち三善三悪なり（大慧、略説

心意意識及習氣、是五受陰因。是心意意識習氣、長養、凡愚、善不善、妄想。略說者、对下広説而言。心意意識習氣乃生死之因、五陰乃生死之果。由不了心意意識習氣長養、故有三界六凡、有漏妄想剎那。善不善即三善三惡也」(T39-419c) とある。

- (19) 末世Ⅱ「末法の世をいう」(『禪学』p.1175)、「末の世。後の時代。末世。末法の時代。仏法の衰えた世。つまり現代、その当世をいう」(『中村』p.1283)。

- (20) 一花五葉之春Ⅱ『禪学』では、「一華」Ⅱ「一輪の花。仏の正法そのもの、または仏性現成そのものにたとえる」とし、また「一華開五葉」Ⅱ「達磨の伝法偈『吾本来弧の茲土、伝法救迷情、一華開五葉、結果自然成』、古来、達磨の予言として知られ、達磨から五代の祖師を経て禪宗の教えが花開くとも、あるいは禪宗が五家として分かれて、その花を開かせるであろうと予言したとも解されている」(ともにp.40) とする。「一華五葉」として、『鎮州臨濟慧照禪師語録』巻一「臨濟慧照玄公大宗師語録序」に「薄伽梵(Ⅱ仏)『正法眼藏涅槃妙心』摩訶迦葉に付す、是第一祖たり、二十八祖菩提達磨に逮びて、十方三世諸仏の密印を提して震旦に来る、是の時中国始めて知る、仏法に教外別伝、不立文字、直指人心、見性成仏の有ることを。厥の後、優鉢羅花(Ⅱ蓮華)時に出現し、芬芳(Ⅱかんばしい香り)、馥郁(Ⅱ香りのよいさま)、一華五葉、香風地に匝る、宝色は天を照らし、各無量の光明を放ち、大千世界を輝映す(薄伽梵「正法眼藏涅槃妙心」付摩訶迦葉、是為第一祖、逮二十八祖菩提達磨、提十方三世諸仏密印而來震旦、是時中国始知、仏法有教外別伝、不立文字、直指人心、見性成仏。厥後、優鉢羅花於時出現、各放無量光明、輝映大千世界」(T47-405a~b)とあり、『禪宗頌古連珠通集』巻六には、「廓然として聖無し、全身を露わす。觀面に相すれば、己を呈し津を隔つ。梁邦並びに魏苑問うこと莫れ。一華五葉自然に春なり(廓然無聖露全身。觀面相、呈己隔津。莫問梁邦並魏苑。一華五葉自然春)」(X65-508a)とある。

- (21) 十方三世一切諸仏…摩訶般若波羅蜜Ⅱ訳注①「鎖籠「起籠」仏事」の注(4)「十方三世一切諸仏…摩訶般若波羅蜜」条を参照。

仏成道会回向（一）

『臨濟宗勤行聖典』第二卷「年分諷經」p.230～233『諸回向清規式』卷一・諸回向之部「仏成道忌半齋」30b～31a・T81-634b『小叢林略清規』卷下「仏成道会回向」T81-716c・「禪文化本」p.185/p.316b「江湖法式梵唄抄」p.186～187

大円満覚⁽¹⁾応迹⁽²⁾⁽³⁾西乾⁽³⁾、心包⁽⁴⁾太虚量周沙界⁽⁵⁾。

仰冀⁽⁶⁾真慈、俯垂昭鑑⁽⁷⁾。

山門⁽⁸⁾三三今月初八日伏値、本師釈迦如来大和尚、成道⁽⁹⁾之辰。

虔備⁽¹¹⁾香華灯燭、茶菓珍饈⁽¹²⁾、以伸供養。

謹集⁽¹³⁾山比丘衆同音諷誦⁽¹⁴⁾。

大仏頂万行首楞嚴神呪、所集殊勳⁽¹⁵⁾、上酬慈蔭⁽¹⁶⁾、伏願。

色空明暗⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾、咸宣微妙法音⁽¹⁹⁾⁽²⁰⁾、蠢動含靈⁽²¹⁾、共証智慧德相⁽²²⁾⁽²³⁾。

十方三世一切諸仏、諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅蜜⁽²⁴⁾。

- （一）仏成道会回向Ⅱ『諸回向清規式』では「仏成道忌半齋臘月初八日」に作り、『小叢林略清規』では「仏成道回向十二月八日」に作る。
- （二）応迹西乾Ⅱ『諸回向清規式』では「応邇西乾」に作る。
- （三）山門Ⅱ『諸回向清規式』・『小叢林略清規』ともに「某門」に作る。

*

大円満覺、迹を西乾に應ず、心は太虚を包みて、量は沙界に周ねし。

仰ぎ冀わくば、真慈、俯して昭鑑を垂れたまえ。

山門今月初八日、伏して本師釈迦如来大和尚成道の辰に値う。虔しく香華灯燭、茶菓珍饈を備え、以て供養を伸ぶ。謹んで合山の比丘衆を集め、同音に大仏頂万行首楞嚴神呪を誦誦す。集むる所の殊勲は、上、慈蔭に酬いんことを。伏して願わくば、色空明暗、咸く微妙の法音を宣べ、蠢動含靈、共に智慧徳相を証せしめたまわんことを。

十方三世一切の諸仏、諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅蜜。

*

广大円満な仏の悟りは、そのすがたをインドに現しました。「仏の」心は大なる虚空を包み込み、その広大な心のはたらきは無量無数の世界すべてにゆきわたっています。

仏祖の慈悲もて、どうか「わたしたちを」ご照覧ください。

当山では、今月の初八日、本師釈迦如来大和尚が覺りを開き、仏となられた時を迎えました。「敬意を込めて」恭しく香・華・灯燭・茶・菓子・ご馳走を供え、供養いたします。つつしんでこの寺に住むすべての僧侶らを集めて、声をそろえて『大仏頂万行首楞嚴神呪』をお唱えします。「こうした供養によつて」集めたすばらしい功德は、慈しみに満ちた仏恩に酬い奉るものであります。伏して願うことには、ありとあらゆる事物事象が、ことごとく、言葉にできない程に素晴らしい教えを説き、すべてのいきものに共に智慧と徳相（「徳をそなえたすがた」）を得させることができますように。世界中の、そして過去・現在・未来という三世の一切の諸もろの仏がたよ、諸もろの尊き菩薩がたや修行者たちよ、偉大なる完成された最高の智慧よ。

〔この功德が成就しますように。〕

*

- （1） 大門満覚Ⅱ本訳註「仏涅槃会回向」の注（1）を参照。
- （2） 迹Ⅱ本訳註「仏涅槃会回向」の注（2）を参照。
- （3） 西乾Ⅱ本訳註「仏涅槃会回向」の注（3）を参照。
- （4） 太虚Ⅱ本訳註「仏涅槃会回向」の注（4）を参照。
- （5） 沙界Ⅱ本訳註「仏涅槃会回向」の注（5）を参照。
- （6） 真慈Ⅱ訳注③「祖師遠忌回向」の注（4）「真慈」条を参照。
- （7） 昭鑑Ⅱ訳注③「祖師遠忌回向」の注（5）「昭鑑」条を参照。
- （8） 山門Ⅱ訳注④「本尊回向」の注（23）「山門」条を参照。
- （9） 本師Ⅱ本訳註「仏涅槃会回向」の注（9）を参照。
- （10） 成道Ⅱ「成仏得道の意。道は菩提の旧訳。菩提を完成して仏となること。成仏・得仏・得道・成正覚とも。成道は一般的意味であるが、特に釈尊が菩提樹下で十二月八日にさとりを得て、仏となったことをいう」（『禪学』p.573）。また、「成道会」として「釈尊成道日に行う法会。臘八会。その成道の月日については、異説があり、南方仏教では、降誕・成道・入滅をすべてヴェーサーカ月の満月の日（大体五月の初め頃）とし、中国や日本では十二月八日を成道日とし、この日に成道会を行うことが宋代頃から行われ、この風習が、近代日本では、仏教各宗に採用されるようになった」（『禪学』p.573～574）とする。
- （11） 香華Ⅱ訳注③「祖師遠忌回向」の注（7）「香華」条を参照。
- （12） 珍饈Ⅱ訳注③「祖師遠忌回向」の注（9）「珍饈」条を参照。

- (13) 合山Ⅱ訳注③「祖師遠忌回向」の注(10)「合山」条を参照。
- (14) 諷誦Ⅱ訳注③「祖師遠忌回向」の注(12)「諷誦」条を参照。
- (15) 殊勳Ⅱ訳注③「尊宿山頭念誦」の注(13)「殊勳」条を参照。
- (16) 上酬慈蔭Ⅱ訳注④「伝燈祖師回向」の注(6)「上酬慈蔭」条を参照。
- (17) 色空Ⅱ「色と空。有と無。存在と非存在。色即空の意で、色が空であること、あらゆる存在が無自性であること」(『禪学』p.420)。
- (18) 明暗Ⅱ「明と暗。明は差別の現象で、偏位を示し、暗は平等の理体で、正位を示す」(『禪学』p.1215)、「明と闇。明るさと暗さ。光と影」(『中村』p.1306)。
- (19) 微妙Ⅱ訳注④「開経偈」の注(1)「微妙」条を参照。
- (20) 法音Ⅱ「説法の声。のりの声。仏菩薩などの説法の音声」(『禪学』p.1121)、「読経の声」(『中村』p.1229)。
- (21) 蠢動含靈Ⅱ「蠢動はうごめき動く、含靈は生きもの。転じて一切の生物を総称するという」(『禪学』p.521)。
- (22) 智慧Ⅱ「事物の実相を照らし、惑いを断つて、さとりを完成するはたらき。物事を正しくとらえ、真理を見きわめる認識力。叡智(英知)。真実の智慧。智と慧。この場合には、慧は、さとりを導くもの、さとりにおいて現れるもの。智は、世の中に向かって発現するもの、差別・相対の世界においてはたらくものである」(『中村』p.950)。
- (23) 徳相Ⅱ「仏のすぐれたすがた」(『中村』p.1021)。
- (24) 十方三世一切諸仏…摩訶般若波羅蜜Ⅱ訳注①「鎖籠」[起籠]「仏事」の注(4)「十方三世一切諸仏…摩訶般若波羅蜜」条を参照。